

### 国際標準化とHL7

里村 洋一 千葉大学医学部教授 日本医療情報学会会長

医療情報に関する標準化の動きが  
 わたらしい。国内の動きもさることな  
 がら、ヨーロッパ(EU)とアメリカ  
 がそれぞれの社会的背景に基づいて、  
 国の範囲を越えての標準化に取り組み  
 はじめているからである。EUは、当  
 然のこと、西ヨーロッパ社会の統一へ  
 向けて、あらゆる面でのEU標準を作  
 り上げようとしており、これをヨー  
 ロッパ再生の基盤とするつもりであ  
 る。医療の情報は単にその一部にすぎ  
 ないが、EU域内総生産の10%近い  
 医療費を考えると決して小さな部分で  
 はない。まして、ほとんど情報サービ  
 ス産業とみなせるほどに情報の比重が  
 高い医療の分野である。熱が入らない  
 わけはない。

アメリカは、ご存じの通り、ゴア副  
 大統領の指揮下に情報インフラの大  
 整備(NII)が進められ、これも、

一旦日本に後れを取ったかに見えたア  
 メリカの産業を長期的に立て直す計画  
 で、実際にその成果が明らかになって  
 きた。手っ取り早く金融機関が情報技  
 術を利用して金儲けに走っているが、  
 これは初期的な現象と私は見ている。  
 情報インフラの効果が本格化するの  
 は、むしろ、金融が行き詰まった時点  
 からだろう。NIIの対象が、企業、教  
 育、医療の三つにまとめられているこ  
 とから、日本の短期的な景気刺激策と  
 は違った成果が予想できる。HIPAA  
 (Health Information Portability and  
 Accountability Act)はこの  
 長期計画のなかの一つの具体的なア  
 クションで、2000年には施行が開  
 始される。医療機関と支払い機関の双  
 方に電子化した医療情報の開示を求め  
 るこの法律は、日本の医療人の感覚で  
 はショックな内容と思うが、医療費の

国内総生産に対  
 する比率14%  
 という高い値が、  
 アメリカ社会の  
 共通認識を生み、  
 医療の情報公開  
 に踏み出したと  
 言うわけである。



里村 洋一

3年前から企  
 画され、今年の8月にスタートしたI  
 SOのTC215(Health Informatics)  
 はこのような、EUとアメリカの  
 共通認識から出発している。ここ  
 では、医療情報モデルをはじめとし  
 て、概念(用語)、通信規格、安全につ  
 いての国際標準を検討しはじめてお  
 り、さらに画像や健康カードも標準化  
 の候補に上っている。これらそれぞ  
 れの分野における標準化の活動には10  
 年以上の歴史があり、HL7のよう

#### 目次

国際標準化とHL7	日本医療情報学会会長 里村洋一	1
日本HL7協会設立にあたって	運営会議議長 尾崎忠雄	2
HL7's 12th Annual Plenary and Working Group Meetings 報告	技術委員会委員長 木村通男	3
設立総会ならびに平成10年度通常総会報告	事務局	4
日本HL7協会組織	事務局	6
第1回HL7セミナー報告	技術委員会広報グループ 石原 謙	7
お知らせ	事務局	8

に、既に事実上の国際標準となっているものもあるが、国際的な場でとりまとめを行うことには、また別の重要性がある。一つは、これら種々の標準規格の間の整合性が得られること、もう一つは、もし、一つの規格がISOの標準と決まれば、将来にわたって市場での優位が確保できることである。医療が産業の一つであるとの認識が薄い日本では、医療情報の標準化が医療の体制を支配するとは考えにくいであろうが、グローバルスタンダードの世界では、医療も明らかに産業の一つであり、自由経済の理論が支配すると考え

られている。

医療体制が40年近くも固定され保護されてきた我が国で、情報の価値や影響力が真剣に論じられることが少なかったが、外部からの圧力が、先ず情報の面からやってきたと言えるのではないか。

だからといって、私はここで、攘夷論を唱えるつもりではない。もはや、国際社会は後戻りができない共通基盤に乗ったつきあいになっている。我々は、好むと好まざるとに関わらず、交渉の場に立たねばならない。我々は、彼らとの討論や交渉の中か

ら、新しいアイデアと目標を見いだして、アイデンティティーを確立しなければならない。我々は、明治の元勲たちが目指した改革に、もう一度挑戦する時期に生きているのであると思う。

HL7は、標準化の具体的な例であり、既に国際的に十分認知されている。ISOは近い時期にHL7をISO規格として取り込むであろう。これをかみ砕いて消化し、自分のエネルギーに変えたとき、日本の医療から世界の標準へと提案するものも生まれてこよう。

## 日本HL7協会設立にあたって

尾崎忠雄 日本電気 運営会議議長

昨年7月28日、設立総会と通常総会が開催され、日本HL7協会が誕生した。ちょうど時期を同じくして8月末に米国で第1回のISO/TC215(Health Informatics)会議が開催され保健医療情報システムの標準化分野における国際的な活動が本格的にスタートしており、日本HL7協会の設立は大変時宜を得たものと言えよう。日本HL7協会ニュースの第1号であるので少し誕生のいきさつを振り返ってみたい。

'97年7月頃だったと思われるが、浜松医大の木村教授からHL7日本支部設立について産業界として協力してほしい旨の打診がJAHISにあった。米国のHL7協会本部からも要望があるとのことであった。HL7協会とJAHISとは、JAHISが発足した'94年に国際標準化動向視察の海外調査団が訪問して以来親交があった。JAHISの診療支援システム委員会がHL7 V2.2の日本語訳を手がけ、JAHISの会員80社に実費配布をした。HL7の翻訳および配布は各国のHL7支部の役割であるが、まだ支

部がない日本で配布できたのはHL7協会本部の好意によるものである。

この様な状況の中で、JAHISとしてもいつまでもHL7協会に甘えてばかりいないで、日本支部設立に協力をすべきという意見が大勢を占めるようになった。'97年8月から'98年2月にかけてHL7支部設立に向けて、日本におけるHL7の推進先駆者である日本医療情報学会里村会長や木村教授、東大の大江教授など学識経験者と会合を重ねて日本HL7協会の構想を練った。その結果'98年3月には里村先生を代表とし、木村先生や大江先生、JAHISの幹部を主体とした日本HL7協会設立準備会が設立された。HL7協会幹部で前会長のハモンド教授や現会長のメーヨークリニックのペラー氏、HL7協会国際委員会委員長のホフマン氏等とは海外、国内で色々な機会を利用して会談して意見交換を行った。HL7協会も日本支部設立に対しては積極的に色々な配慮をして頂き、'98年の6月にはHL7協会と日本HL7協会設立準備会の間で日本支部設

立に関する契約書の締結にこぎつけることができた。

日本HL7協会が設立されたことによってこれ迄個々人の努力に依存してい

た交流が組織的に日本側の意見を集約してHL7協会に伝えることができ、従来より効率的に影響を持って発言が出来ることになる。同時に、HL7が真に国際的な標準に成長するために日本も貢献できよう。

日本HL7協会の会員としては当初予想していたよりはるかに多い個人、法人会員の参加を得たが、これはHL7への皆様の関心の大きさを示すものである。HL7を真の日本の保健医療情報システムのメッセージ交換の標準として育て、日本の保健医療情報システムの発展に貢献できる様に日本HL7協会へのご支援ご協力をお願いしたい。



尾崎 忠雄

# HL7's 12th Annual Plenary and Working Group Meetings 報告

木村通男 浜松医科大学教授 技術委員会委員長

標記の会合が、1998年9月14日から18日まで、サンディエゴのパラダイスリゾートにおいて開催された。会場は有名なSea Worldと同じInner Bayに面するリゾートで、すべて平屋のコテージが散在するなかに、砂浜、テニスコートやミーティングルームがあるという、優雅なものであった。

HL7協会は年に3回アメリカ各地でWorking Group Meetingを開催し、そこでは各種のチュートリアルとともに、10以上のワーキンググループが開かれる。また、年一度、晩夏におこなわれる会合では、先だってPlenary sessionが1日開かれ、VA(米国退役軍人健保組合連合会)のCIOによる保健医療政策についての基調講演や、HL7 Overview, HL7 へのXMLのインパクト、などについての講演が、数百人の聴衆の前でおこな

われた。

この基調講演の直後、International Forumとして、International Affiliate 各国代表が、各自の国での活動や、関連する医療情報分野の報告をおこなった。筆者も、日本HL7協会の発足を紹介した。

これらすべてに先だって、13日には、HL7 International Committeeが、各国Affiliateと、HL7 Board memberとの参加で開かれた。筆者はまずこの場で、日本HL7協会の発足を報告した。この会合では、各国からの報告や、医療情報ISOに対するHL7協会の姿勢(WG2 Message & Communicationsの座長にHL7協会元会長のEd Hammondが就任すること、V2.3.1をISOのFast Trackに提出することなど)、主として欧州でよく使われている請求文書の電子化規格UN/EDIFACT

との協調、V3 RIM(後述)への参加呼びかけ、などがあった。

次の日からの4日間には、各種のチュートリアルと、数多くのワーキング

グループ会合が開かれた。そのワーキンググループ会合をつぶさにフォローすることは困難であるが、日本にとってより重要と思われるものは、SGML/XML WG と、V3に関するものであろう。SGML/XML WGは、行く度に参加者が増えており、この分野の注目度がわかる。すでに日本のMMLについては筆者が昨年の会合で報告したが、今は欧米日と協力して新しくXMLを用いたエンコーディングの規範作りを進める算段となっている。また、V3について、各国Affiliateに強く参加が求められているのが、RIM(Reference Information Model)への各国事情のサブミットである。V3のこのモデルは、基本的にはアメリカの医療体制を前提に作られているが、当然作成者側もそれがグローバルなものではないことは理解しており、各国事情を加味したものに充実を図っている。V3のリリースは99年9月とされており、ここ半年での日本からの貢献が是非必要である。そのためにも、日本から、特にHISベンダからの、今後のWorking Group Meetingへの参加が重要であり、HL7協会サイドの各氏からもその点での要請が筆者にあった。今後のHL7 Working Group Meetingの予定は、99年1月24-29日(ノースカロライナにおける



木村 通男



(写真提供：九州大学 坂本憲広先生)

ISO TC 215 WG2の直後)於オーランド、である。  
ド(フロリダ州)、4月25-30日於トロ

## 設立総会ならびに平成10年度通常総会報告

日本HL7協会設立総会ならびに平成10年度通常総会が、7月28日、東京湯島の全国家電会館で開催され、オーストラリア、カナダ、フィンランド、ドイツ、オランダ、ニュージーランドに次いで第7番目のHL7支部(International Affiliate)として活動を開始した。

設立総会では、発起人を代表して里村洋一千葉大学教授、日本医療情報学会会長が挨拶ならびに"国際標準化とHL7"についての説明を行った。

司会の日立製作所の中井幹爾氏より推薦があり、満場一致で里村洋一千葉大学教授を議長に選任し、石原謙愛媛大学教授と日立製作所の鈴木隆一氏が

議事録署名人に選任された。

第1号議案定款承認の件は、日本アイ・ビー・エムの松崎純一氏から説明を行い、原案どおり承認された。

第2号議案会員種別、会費および負担金等規則承認の件は、富士通の寺井悦治氏から説明を行い、原案どおり承認された。

日本HL7協会は、総会、運営会議、技術委員会で組織され、事務局はJAHISに委託された。

運営会議は議長に尾崎忠雄(NEC)、副議長に木村通男(浜松医科大学教授)、委員に大江和彦(東京大学教授)、川真田文章(大塚製薬)、松崎純一(日本アイ・ビー・エム、日本H

L7協会事務局長)で構成され、協会の代表として運営を行う。

技術委員会は委員長には木村通男(浜松医科大学教授)、副委員長には大江和彦(東京大学教授)、川真田文章(大塚製薬)の各氏が選ばれ、参加意思を表明した会員および代理人により構成され、HL7標準規約の調査/研究、利用に関する事業等、実質的な活動を行う。

会員の種別は、個人会員、ユーザ法人会員、事業法人会員、賛助団体会員、特別会員である。

続いて行われた通常総会では、尾崎忠雄運営会議議長が議長となり挨拶と開会を宣言した。

設立総会と同じく石原謙愛媛大学教授と日立製作所の鈴木隆一氏が議事録署名人に選任された。

第1号議案平成10年度事業計画承認の件は、木村通男浜松医科大学教授から説明を行い、原案どおり承認された。

第2号議案平成10年度収支予算承認の件は、富士通の寺井悦治氏から説明を行い、原案どおり承認された。

本年度は、初年度として運営基盤の確立を務める。その努力の中で、技術委員会の実質的活動をできるだけ早期に立ち上げ、国内での利用促進と国内要求仕様の集約と規約への反映に務めるため、以下の方針のもとに活動する。



日本HL7協会設立総会、定期総会

## 方針1. 運営基盤の確立

- (1)組織および体制の整備
- (2)財政基盤の確立
- (3)事業および技術委員会・運営会議の運営方式の確立
- (4)HL7協会および国内外関係団体との協力関係の確立

## 方針2. 標準規約の普及推進と意見反映

- (1)HL7標準規約の調査研究および国内での利用促進
- (2)国内要求仕様の集約とHL7標準規約への反映

実質的な本会活動は技術委員会の活動によって達成され、本年度の技術委員会は主に以下の活動を行う。

### 1. 作業グループの設置

委員の協議によってテーマを定め適宜作業グループを設置する。作業グループは恒常的なものでなく適宜柔軟に運用される。また、作業グループは日本医療情報学会やJAHISなどの関連団体における活動グループとも密接な連携をとって運営され、効率的な標準化活動となるよう配慮していく。技術、情報教育、広報、ルール等の4作業グループ設置が予定されている。

### 2. 参画機会拡大のための体制整備

会員は全国から参加しており、地域による参画機会の制限ができるだけ少なくなる様努力が必要である。このため、メーリングリストなどの電子会議体制を整え、できるだけ地域の差なく活動ができるよう配慮していく。

### 3. 活動ルールの整備

#### (1)意見集約の規則

本会は契約に基づくHL7協会の国際加

盟団体としての権利と義務を有し、HL7協会の提案あるいは日本国内の要求に関わらず、HL7標準規約に加えられることが望ましい変更について、日本国内の意見を集約し、HL7協会に伝える権利と義務を有する。この意見は、国際加盟団体の集約された意見として尊重される。この本会の最も重要な機能の一つである意見集約のルールを定め運用して行く。

#### (2)知的財産権管理の規則

HL7協会との国際加盟協定は知的財産権について明確な定めがある。この協定に基づき、会員が遵守すべき知的財産権の管理規定を定め運用して行く。

### 4. HL7 V2.3日本語訳のまとめと配布

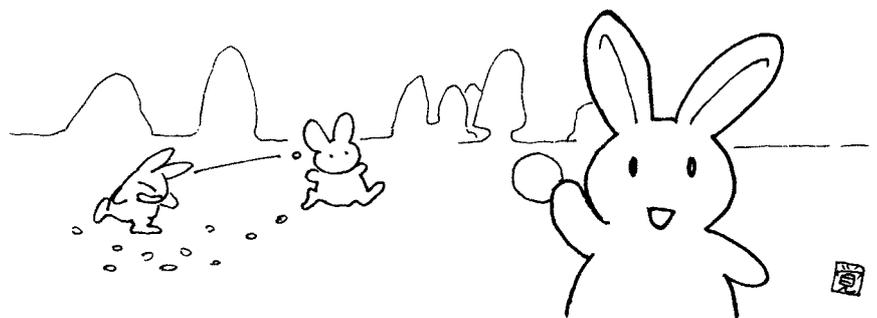
本会の特別会員であるJAHISが進めてきたHL7 V2.3日本語訳の提供を受け、そのまとめと成果の会員への提供を行う。

### 5. 公開セミナーの実施

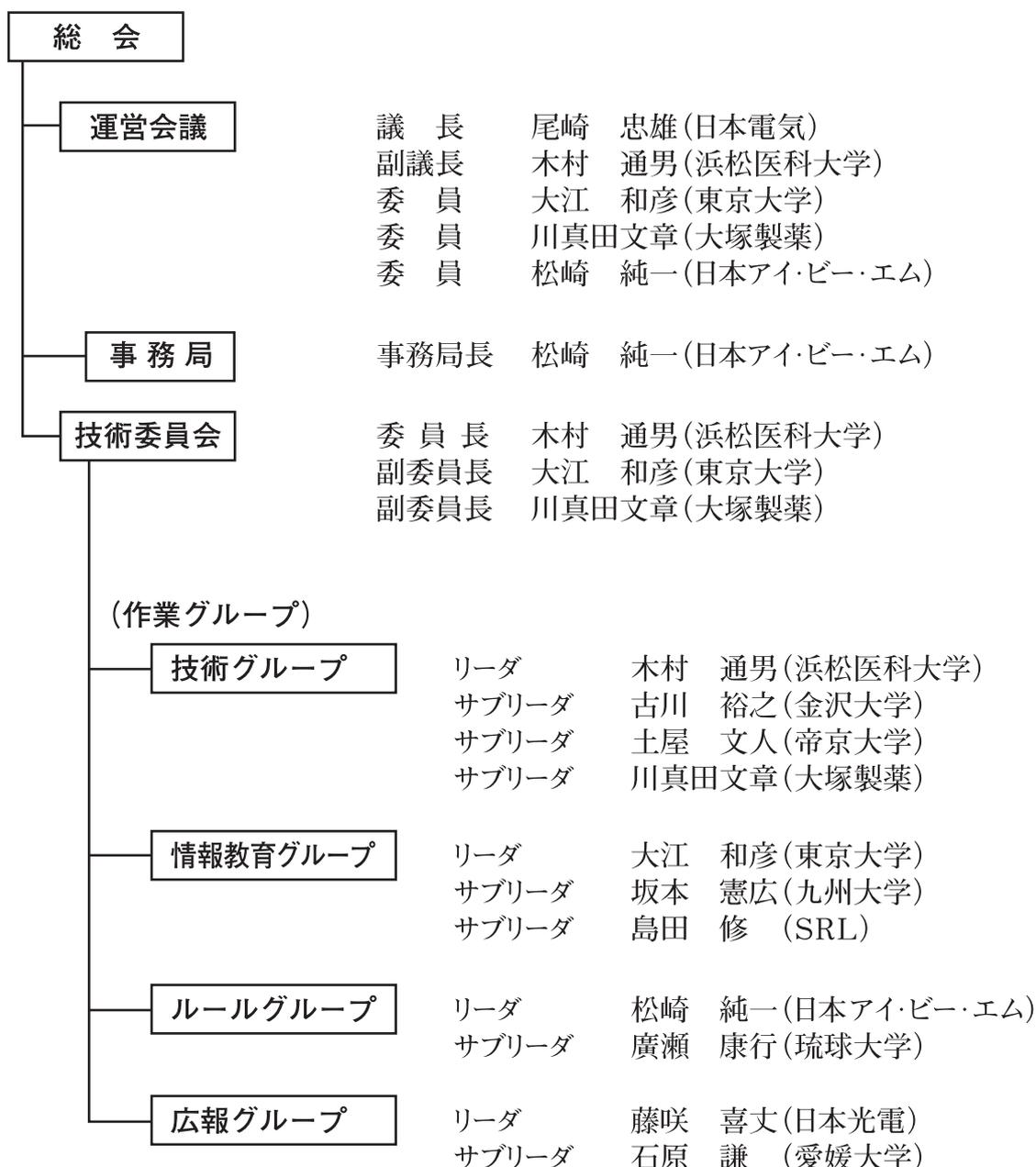
本会活動の理解を広めるため、公開セミナーを開催する。

### 日本HL7協会設立総会参加者

個人会員14名、法人会員30社  
(内JAHIS会員26社)



## 日本HL7協会組織



### 作業グループ活動方針（各リーダーより）

#### 技術グループ（木村 通男）

- ・日本から提出された要望が加味されているHL7 V2.3.1の、HL7協会での批准と日本での普及
- ・実装が広がるにつれて見つけられる、日本での利用の際に不具合な点の情報収集と対応の検討
- ・HL7 V3へ向けての、リファレンス・インフォメーションモデルに対して、日本の状況を加味したものとするための、要望の提出
- ・SGML/XML WG に対して、日本でのMMLの経験を提供し、XML形式での記述においての国際協調の推進

情報教育グループ（大江 和彦）

11月に神戸で第1回のHL7入門セミナーを開催し、150人以上お集まりいただきました。今後もHL7の入門、実装、最新状況などについて年3回程度のセミナーを開催していきたいと考えています。また、HL7だけでなく関連するメッセージ規格やコードの問題、MMLやMERIT9についても教育セミナーを開催したいと思います。セミナーに使用した資料もWWWに掲載していただく予定です。ご要望がありましたら事務局までお知らせください。

ルールグループ（松崎 純一）

当作業グループとしてはHL7日本支部会員が遵守する必要がある運用規則を整備することがテーマです。内容としては、1) 標準規約制定に係わる投票ルールの制定 2) 著作権・知的所有権等に係わる運用基準の制定です。これらのルール制定にあたっては、日本独自のものを作るのではなくHL7本部、各国支部と共通のものとしてゆく必要があると考えております。本年度内に具体案をまとめ次回総会で会員の皆様のご承認をいただけるよう進めてまいります。広報グループ（藤咲 喜丈）

それぞれの作業グループから、そして会員の皆様からの要望を受け日本HL7協会の活動を広く会員および世の関係者に伝えることを使命と考えております。まずは年2回の会誌発行、Webによるタイムリーな情報提供を行う予定です。まだ協会自体が始まったばかりですから、臨機応変に活動したいと思いますので、ご要望は適時事務局、または広報担当にお知らせ下さい。

## 第1回HL7セミナー報告

石原 謙 愛媛大学医療情報部教授 技術委員会広報グループ

さる1998年11月19日から21日に神戸ポートアイランドの国際会議場で開催された医療情報学連合大会の最終日の午後、日本HL7協会初主催のHL7セミナーが開催された。当初数

十名の参加が予想されていたが、約160名の熱心な参加者で会場は、文字通り満員の熱気に包まれた。技術委員会委員長の木村通男教授（浜松医科大学医療情報部）の短いが猛烈に中身の

濃いレビューに引き続き、情報教育グループサブリーダーの坂本憲広先生（九州大学医療情報部）がHL7メッセージ入門の明快なガイダンスを講義された。休憩の後、情報教育グループリーダーの大江和彦教授（東京大学医学部医療情報部）が患者基本情報の問い合わせや検査オーダーと結果の通知を例にC++による実装の詳細を、初心者にも分かりやすい説明と質疑で講義された。後日の参考資料としても活用できるハンズアウトが配布されたこのセミナーは最後まで席を立つ人がおらず、内容の充実ぶりを物語った。

今回参加できなかった方々から、是非次の機会を早く設けて欲しいとの申し入れがあり、急遽東京でもこの2月に同じ内容で開催することとなっている。



第1回HL7セミナー会場

## お知らせ

### 第二回HL7セミナーのお知らせ

第1回HL7セミナーは好評の内に終わることができました。最終的には会場の都合で人数制限をせざるを得ない状況となり、皆様にはご迷惑をおかけしました。そこでご要望にお応えし、遠隔地であることやご都合で参加できなかった方のために同じ内容のセミナーを以下の要領で開催します。詳細は日本HL7協会ホームページをご覧ください。事務局(担当: 蛸名または篠崎)あて案内状をご請求下さい。

日時: 1999年2月8日(月) 13:30 ~ 16:30  
会場: 全国家電会館(東京文京区湯島)大講堂  
tel. 03-3832-4291  
人数: 200名迄  
会費: 5000円(日本HL7協会会員は無料)

### 日本HL7協会ホームページのご紹介

広報グループでは、タイムリーでオンデマンドな情報提供をめざしホームページを用意しています。まだ開設したばかりで内容の充実はこれからではありますが、どうぞご利用ください。また、ご意見、ご要望などもよろしくお願いします。

<http://www03.u-page.so-net.ne.jp/wc4/hl7japan/>

参考: HL7協会ホームページ <http://www.hl7.org/>



## 編集後記

新しい組織の新しい会誌がやっと完成しました。当初、昨年の秋に創刊号をと予定しておりましたが、実作業は作業グループが発足した11月以降となりました。担当した我々も原稿の執筆はともかく、会誌のデザインから取り組むこととなり、思ったより時間がかかってしまいました。ページ数は少ないですが米国のHL7協会会誌のイメージを持たせるべく努力したつもりです。出来映えは如何でしょうか? 今後も国内、海外におけるHL7の動向を皆さんにお知らせしていきたいと考えております。我々の活動が医療情報システムの発展に寄与できるよう努力しますので、応援をよろしくお願いします。

発行者 日本HL7協会

代表者 尾崎忠雄(運営会議議長)

所在地 〒105-001 港区虎ノ門 1-19-9(虎ノ門TBLビル6F) 保健医療福祉情報システム工業会内  
Tel 03-3506-8010, Fax 03-3506-8070 <http://www03.u-page.so-net.ne.jp/wc4/hl7japan/>

編集者 技術委員会広報グループ(藤咲、石原)

印刷所 (株)NECドキュメンテクス